

ハリー・ウラタの採集ノート： 井上熊太郎・安竹宇一郎が語る〈ホレホレ節〉

中 原 ゆかり

0. はじめに

へ 行こかメリケン 帰ろか日本 ここが思案の ハワイ国

〈ホレホレ節〉は、19世紀末にハワイに渡った日系一世たちが、砂糖耕地の労働の折にうたった仕事歌である。「ホレホレ」とはハワイ語で砂糖黍の枯葉を手でしごきとる作業のことをさし、ホレホレの作業の時に多くうたわれたことからこの呼称がある。その歌詞は相当に多く、仕事の辛さや故郷への思い、セクシャルな歌詞など内容も豊富で、当時の一世の生活感情を反映している。移民史には移民初期の一世たちの過酷な生活を物語る資料として、必ずといってよいほどその歌詞が掲載されてきた。

〈ホレホレ節〉は二世へと継承されることはなく、第二次世界大戦後には消えていった。しかし帰米二世のハリー・ウラタ（Harry Minoru Urata 浦田実）が、1960年代から1970年代にかけて高齢となった一世たちを約30名訪ね、〈ホレホレ節〉を録音した。一世たちの〈ホレホレ節〉は口頭で伝承されてきたため旋律の違いが著しかったが、ウラタは多くの一世から録音した〈ホレホレ節〉をもとに旋律を標準化して1981年に著作権を獲得した。そして自らの営む音楽教室で教え、CDを制作し、日系のイベントでうたう等して普及に努めた。今日、ハワイアンや日本民謡、講談等でとりあげられるようになった〈ホレホレ節〉は、ウラタが標準化した旋律の影響のもとにある。

ウラタは一世たちのうたう〈ホレホレ節〉を録音する際、耕地での仕事の状

況等についてもインタビューをおこない、録音している。そして自ら録音テープを聞きなおして採集ノートに書きとどめている。ウラタの採集ノートは、彼が著作権をとるまでの過程の一つであり、一世たち自身が耕地での仕事の状況や当時の生活について語った貴重な資料である。なぜなら、これまで多くの移民史に〈ホレホレ節〉について数ページ記述されてきたが、一世自身の言葉は全くといってよいほど記述されてこなかったのである。本稿ではウラタの採集ノートの中から、前号（中原 2010）で扱った朝倉カツエ、藤間美佐にひき続き、井上熊太郎と安竹宇一郎の部分を紹介したい。

筆者がウラタにおこなった2005年2月のインタビューによれば、ウラタが井上熊太郎と知り合ったのは、第二次世界大戦後の一時期、日本語ラジオ放送KULAで開かれていた「チャプスイ・メロディ」という番組であった。「チャプスイ・メロディ」は、アマチュアがスタジオにやってくる日本の歌謡曲を覚える番組で、KULAに勤務していたウラタは楽譜と歌詞を準備し、企画、アナウンサー、ピアノ伴奏を一人で勤めた。スタジオに来るアマチュアはほとんど日系一世たちであり、その一人に井上熊太郎がいた。ウラタは、第二次世界大戦中に強制収容されており、収容所で知り合った日本語新聞『ハワイ・タイムス』の記者をしていた川添樫風の影響で、一世たちの〈ホレホレ節〉を記録する必要性を感じていた。そしてウラタは、「チャプスイ・メロディ」に出演した一世たちに〈ホレホレ節〉を知っているかどうかたずねた。既に〈ホレホレ節〉がうたえるような一世は数少なくなっていたが、井上熊太郎は耕地で覚えたくホレホレ節〉をうたうことのできる貴重な存在だったのである。

その後ウラタは1949年から1951年まで日本に音楽の勉強に行き、GHQの通訳等をしながら、古賀政男、レイモンド服部、米山政夫らに作曲法や発声法、ギター等を習い、ハワイに戻って音楽教室を開くようになる。井上熊太郎の〈ホレホレ節〉と耕地の状況について話を録音するのは、1960年のこととなった。1960年には「官約移民75周年」を記念して、戦前にハワイに滞在した経験のある日本の歌謡界の作曲家・レイモンド服部（服部逸郎）が来布した。服部はハワイ日系独自の民謡はないかとウラタにたずね、ウラタは井上熊太郎の〈ホレ

ホレ節〉を録音、採譜して服部に渡したのである。服部は井上がうたいウラタが採譜した〈ホレホレ節〉をもとに、〈ホレホレ音頭〉を作詞作曲した（『ハワイ・タイムス』1960,9/3）。〈ホレホレ音頭〉は現在でもハワイの盆踊りの場で踊られている。

ウラタが採譜した井上の〈ホレホレ節〉は、服部が編曲してピアノ伴奏をつけ、ウラタがうたってハワイのラジオ日本語放送で何度か流された。問題は、それをきいた一世たちの反応である。多くの一世たちは、ウラタがうたった〈ホレホレ節〉を「〈ホレホレ節〉ではない」と批判した。口頭で伝承され、楽譜のなかった〈ホレホレ節〉の旋律は一人一人異なっており、なおかつ自分のうたう節こそが本当の〈ホレホレ節〉だといって譲らなかったのである（服部 1967）。ウラタはこの経験により、「井上氏だけの歌を採譜したにすぎなかったので、多くの人から色々と非難を受けた。服部氏も私に『もっと沢山の人達のホレホレ節を録音して、その中からこれだというようなものを採譜した方がよい』といわれた」（浦田 1981）と述べている。そしてこれをきっかけに、〈ホレホレ節〉の保存のために正調をつくることをめざし、以後20年にわたって一世たちの〈ホレホレ節〉を録音して歩くことになった。結果的には、井上熊太郎の歌の録音、採譜、編曲、ウラタがうたつてのラジオでの放送、そして一世たちの反応が、ウラタに口頭伝承の音楽の特徴を自覚させ、保存のための取り組みに導いたことになる。

安竹宇一郎の録音は、ウラタが1975年におこなったものである。ウラタが安竹を知ったのは、日本語ラジオ放送KOHOが日本劇場で開いたのど自慢大会に安竹が〈ホレホレ節〉をうたつて出場したことによる。〈ホレホレ節〉をうたえる一世を探していたウラタは、ラジオを聞いて約1週間後に安竹を訪ね、インタビュー・録音をおこなった。安竹は、10年後の1985年、「官約移民100周年」にアリヨシ知事、マンスフィールド駐日大使、安倍外相、大河原駐米大使が出席して開催された記念の昼食会に、他の高齢の一世、二世とともに招待され、100歳で出席している。そして「こんなうれしい日はない。いまでも砂糖キビ畑で歌った〈ホレホレ節〉を間違えないでうたえる。苦労が実った」と、語って

いる（朝日新聞1985,1/7夕刊）。彼にとっての〈ホレホレ節〉とは、まさに〈ホレホレ節〉をうたった当時の生活そのものだったのであろう。

井上熊太郎、安竹宇一郎ともに、ウラタが〈ホレホレ節〉を録音した一世として、新聞、雑誌、エッセイ等にその名が記されているため、本稿でもそのまま実名を記した。なお、ウラタのノートそのものは手書きで縦書きに記されているが本稿では横書きに改めた。そのためウラタのノートの漢数字は、本稿では全て算用数字となっている。漢字、かな等の表記については不統一がみられるが、ウラタの表記にそのまま従った。また、特にわかりにくい単語については、著者が注をつけた。さいごに著者は2005年2月にウラタから採集ノートのコピーを渡され、日本での公開を依頼されたことを付け加えたい。

1. 井上熊太郎 新潟県加治村出身、明治13年（1880）生まれ 録音1960年、録音当時80歳

浦田「では井上熊太郎さんにホレホレ節のことを色々お話したいと思います。

井上さんよくいらっしゃいました」

井上「ハイどうも」

浦田「井上さんはあのフルネームは井上熊太郎さんですね」

井上「ハイハイ」

浦田「お年はいくつなんですか？」

井上「86です」

浦田「86ね」

井上「ハイ」

浦田「明治何年生まれなんですか？」

井上「明治13年」

浦田「明治13年、ご出身地はどちらですか。郷里は？」

井上「新潟です」

浦田「新潟ですか。新潟のどちらのどちらなんですか？」

井上「新潟の桜のあるところ加治村です」

浦田「ほー、そしてあの井上さんはいつハワイに来られたんですか？」

井上「1899年ですからもうアメリカの政府ではないで、ハワイの王朝時代にきました」

浦田「そうですか、いつでしたか」

井上「1899」

浦田「1899年ですね。いくつの時こられたんですか」

井上「19の時です」

浦田「19ね、まだ少年時代ですね」

井上「ハイ」

浦田「そうすると、その次のハワイのね、ここに上陸された時のその王朝時代のハワイってどうゆう様な具合だったんですか？」

井上「それがあんだ、今はハアーもうないが、移民局へおし上げられて、そうしてしばらくたってから條約の中でハワイのオーラウに行ったんですが、その時にハワイのハワイ島のヒロにあがったところがやし島というこまい島のところに追い上げられて女の病気の者と腹の太い者はええ家に入れたけど我々夫婦でも軒下、独身者は木の下で雨降って来た時はウーウーウーなんてみんなおらの所に逃げて来て、とても今話ししてもほんとうでないかと思うくらいつらかったですよ」

浦田「ホウー、その当時ですね。あの一元はホノルルに上陸されたんですね」

井上「ハイ？」

浦田「ホノルルに船が入ったわけですね」

井上「ハイ、ホノルルに船が入ったんです」

浦田「その当時のホノルルですね。そんなに沢山家はなかったわけなんですけども、どうゆう様な家があったんですか？」

井上「情けなかったですよ。まあ、今はあんないい栈橋は沢山あるけども草が生えてびしゃりびしゃりあれしおってから、ほんと情けなかったですよ」

浦田「そしてハワイの土人なんかなんですかあの、グラスハットですか？この

小屋なんかに住んどったんですか？」

井上「イエー、やっぱり住んで居りましたの」

浦田「ホウでキャベ畑なんかキャベブッシュユなんか沢山あったんですか？」

井上「キャベばかりでね」

浦田「今のあのーフォートストリートですネ」

井上「ハイ」

浦田「あの付近はどうなっていたんですか？」

井上「あの付近はまあだ大小よかったけども、とても家なんかこんなもんじゃにゃーほんと話にならん家でしたよ」

浦田「ホウー、それでホノルルに上陸されてそれからハワイ島のオーラーのプランテーションに行かれたんですか？」

井上「ハイ、プランテーション。プランテーションでもまだ開いてもなんにもおらんので、我々が行ってから今なら千円も二千円もする赤木をみんな焼いてそして開拓していったんですよ」

浦田「ホウー、何もなかったんですか？」

井上「何もなかったんです。みな山を開いてそうして道もないところだから、そんな何百もなんぼもする木をみんなたいて、そして後開拓していったんです」

浦田「ホウー、その頃ですね。井上さんと一緒にあのー、日本から来られた人、何人くらいいられたんですか？」

井上「そりゃ、オーラウへあがってそれがとても又情けなかったんですよ。オーラウの夫婦と独身もんが77人が一緒に1つのハウスにいれられて…」

浦田「1つのハウスというと77人がワンハウスに入れられたんですか？それじゃ大きなハウスですね」

井上「おーきなハウスで中をずっと通って行って六尺のところに柳行李もおいて米もおくバケツもおいてそしてそこに寝ておって、そうして2つの夫婦の女だけでちっと寝ている時は足でもちっとおかしゅにしておったら独身もんの奴等が来てから手をたたいて喜んで…ほんとに情けなかったん

ですよ」

浦田「それではあの、独身者とそれから夫婦ものですね。こりゃあ別々ぢゃあなかったんですか？」

井上「ノーノー、一緒も一緒、かこいもなんにもしておかなかったから、ほんとに情けなかったんです」

浦田「その…大きなまあ講堂みたいな所なんですよ、まあ学校の？」

井上「ハイハイ」

浦田「それはこちらの政府で建てたんでしょう？」

井上「あれはやっぱりこの…開拓するコンパニーの方がプランテーションがオーラーのプランテーションがやったんです」

浦田「ハアア—そうですか。ハハハ…それではですね。その当時のあの仕事の模様ですね。何時に起きてどうゆうような仕事をされたかという様なことを1つお話を伺いたいんですけど」

井上「それが又、汽車もなしなんにもない時だから朝の6時に起きてホーをかついで又は、大きな木を切るものを持ってから起きて、そうしてね、歩いて行く時に裏の方にカナカの奴が馬に乗ってフィップ（whip）でパーンパーンと音をたたいてまるでほんとに情けない目にありましたよ」

浦田「であの、仕事は何時からなんですか」

井上「仕事はやっぱり10時間、今と違って10時間でしたよ」

浦田「8時間でなくて10時間」

井上「ハイ10時間」

浦田「朝の何時からですか？」

井上「朝の7時から」

浦田「そして夕方は何時までですか？」

井上「夕方の4時までぢゃな丁度10時間じゃから」

浦田「勿論ランチタイムはあるわけですね」

井上「えーランチタイムはあります、やっぱり30分位」

浦田「30分のランチタイムはあるわけですね」

井上「えー勿論その人々によって仕事は違うんでしょうけれども、井上さんは
どうゆう様な仕事をしておられたんですか？」

井上「その時はやっぱり開拓。木を切って焼いて開拓していくんですよね」

浦田「女の方なんかはどうゆう様な仕事をしておったんですか？」

井上「女なんかは一、やっぱり後片付け…その時分まだオーラーなんか條約時
代なんで女もえーあつたども、外の仕事したり洗濯したりしてね、まだ
仕事に出なかったですよ」

浦田「その当時ですね、オーラーで男と女の比率がですね、どうゆう具合だっ
たんですか？男が何人で女がどれ位おったんですか？」

井上「女が9人と男が77人」

浦田「ホー、それじゃ絶対男の方が多いわけですよ」

井上「男ばかりで、それでほんとに情けなかったですよ」

浦田「ホー、で開拓されてそれで大分落ち着かれてそれからどうゆう様なお仕
事をなされたんですか？」

井上「それから条約切れたらすぐそれからオアフ島のエワのプランテーション
へ行って、そしてエワのプランテーションでとにかくホーハナ¹⁾したり
水あてしたりしましたけれども、それがあしたなにも英語も分からん何
も分からんのにワヒネ²⁾のルナ³⁾になってホノルルに出るまで日本全国
の女の人と一緒に仕事したんですよ」

浦田「ホー、それではミスター井上は、女の方のルナみたいになったんです
か？」

井上「はい、ルナですよ」

浦田「ねえー」

井上「長い間…ホノルルにストライキのためにホノルルに出て、そして元の
仕事をやろうと思うつもりのを俺のハウスにはすぐハオレを入れておっ
たし、今度やったこともないピッケンハナの一番悪い…をやったんで豆
が手に出来て握られんようになって、そうしてホノルルへ出てきて店を
やったんです」

浦田「ホー、その井上さんがルナをやっておった時代ですね、女の人の仕事ってどうゆう様な仕事だったんですか？」

井上「仕事は水あてとか…」

浦田「水あてってなんなのですか？」

井上「水あてっちゅうのはつまり今は畑のキビにこうなつたところへ、そうしてハナワイとゆうてからこの水をキビにやったんですよ」

浦田「それはあの…どうゆう様にして、今ならなんですか、今ですと山の方からですね、あのといみたいのでこう、ずーっとしますね、昔はそうゆうことはなかったんですか？」

井上「そうゆうことはなかった、どんどんどんみんなそれがとてもたいしてその頃はあんまりでなかったんですよ。今度呼び寄せ婦人がつまり今のプランテーションに始めてやった時には、ポリキーやらポトリコやらスパニッシュやらの女の人を12人程使ってやっていったんだけど今度呼び寄せ婦人と何が写真結婚ができる様になつたらずーっと今度あんだ5ー6百人の女の人に来てから、今度は女の人が沢山になってから斉藤さんやら安倍さんやら、他の人がもうルナをすいてね」

浦田「そう、もう沢山女の方が沢山来るから」

井上「それで、おいら2人いるのが6人にもなつたんですよ」

浦田「その当時ですね、オンナの方まあ写真結婚、呼び寄せられるでしょう。そうするとここでパーティみたいなことあつたんですか？」

井上「それがパーティといってもね…情けなかったのよ。條約時代のようになかったけどもね、なーんにもないただただあんだ、写真結婚で来たのに、若いいい男だと思つてきたのに、来て見ればあんまり年寄りだとうてから泣いて別れるちゅうのが、あらゆる者が沢山ありましたよ」

浦田「それでもはるばる日本から来てすぐに別れることも出来ないしね」

井上「それでね、泣き泣き一緒になつたんですよ」

浦田「ホー、井上さんはこちらで結婚されたんでしょう？勿論…」

井上「ノー、日本から連れて来たんですよ」

浦田「19の時に」

井上「ハア—」

浦田「ホウ—」

井上「それが風紀の乱で女のいない時だから、人の女を泥棒し取ったりしてから
ゴロツキが居ってから、あした仕様がなかったもんだから、日本政府が
我々が結婚して6ヶ月たたねば、渡航を許さんもんだから、それで子供
だのに、おら—かかあを連れてきたんだよ」

浦田「ホウ—、そうですか。それでは随分早く結婚されたんですね」

井上「しょうねえ、結婚せにゃ来られんから…え—」

浦田「それからあの一、今いった、エワのプランテーションから今度ホノルル
に出られてそして何されたんですか？」

井上「エワのプランテーション…このホノルルへ出てから今リリハからクワイ
のあの…まっすぐパールハーバーへ行く道のところパケ⁴⁾のいなげなハ
ウスを店をみんな買うてそうして人に貸して自分もはいつて商売やって
おったところが政府がそこへ道をつけてこわしてしもうたんです。それ
で泣いたんですよ。それから今度のあのマウイの労働組合の者を、労働
組合でない野菜組合の者が出て来てチャンフーンに三千何百ちゅう、
たまなを送ったが、ゼニくれんけん、さいさんしょくしに来た。それで
ユ—ら、さいさんもいいけど、もしそんなに…こうゆうたってゼニなん
ぼ持ってきたかゆうたゼニもって来たんゆうた、馬鹿たれゼニ持ってこ
んでそして裁判が出来るか、俺もチャンフーンとこ行くけチャンフーン
とこ行って泣きつけいって、そしてチャンフーンに泣きついてから俺と
お前はどっちもタマナ1俵作るてゆうでねえが3千俵何百俵ってルナか
らお前どっからそんなできるだけやってくれってゆうた、うんくさった
のを長いつばに條約でやったわ、とゆうてからとうとうじゅさが足をな
げ出していきなりどけつかつたが、それでも千何百円ってくれたんです
よ。それでマウイの農業組合もんが俺にやってくれゆうからこんだ俺が
物産問屋…今のパウオへあがるまで60まで物産問屋をやったんです」

浦田「ホー、それは順調にいきましたでしょう」

井上「順調に…なんてゆうても大きな、あした物産問屋ゆうたってその頃はベレタニーにおだにあれに俺にそれにりょうどと4軒くらいしかなかった時だから新聞には始めてアメリカの軍艦が来た時分にハワイになんぼこしらえてなんぼで足らんなゆうてやかましくゆうもんだから、とうとう俺が裏オアフに何十エーカーとゆう…人を頼んで野菜作ってパイナップルつくってそして売ろうと思ったら今度はあんた軍用船が持って連れて来て買わんもんだからそれで何万円ちゆう損になったんです。このカリヒの山根商店でも上も下もブロック俺買うておいたところが38セントで買うておったが今は3円50銭もするゆうて、それもみんなその損したのに入れました。こうしている中に1日に百ドルもとられたこともマウイ島もオアフこうしてハワイもカワイ島も物をどんどん送って来いって…ほんと情けなかったんですよ」

浦田「商売で色々損をしたり、ねえ、そして色々つらいこともあったでしょう」

井上「儲けたこともありました」

浦田「それでですね、井上さんのあのー、耕地に…プランテーションに仕事を
して居った時に歌われた歌ですが、ホレホレ節ですか？」

井上「キビの中で今と違ってみづくであってから泣く様な時がほんとにつらい
時には思い出してはやっぱこのホレホレ節が、忘れられんよ」

浦田「そうですか？そのホレホレ節をですね、あの井上さんにね、唄って
いただきたいんです。お願いします」

井上「ハイ、いいの」

浦田「ハイいいです」

井上

へ 条約きれたらよー キナウに乗りて 行こかマウイの スペクルへ

へ 条約切れるしヨー 頼母子落ちた 故郷(くに)の手紙にゃ 早よ戻れ

へ行こかメリケンヨー 帰ろかジャパン ここが思案の ハワイ国

これが1きりなんだで」

浦田「ハアア、どうもどうも有り難うございました」

井上「悪いのはなんぼでもあるども日本から来たもんでもあの悪いのを唄わんのよ」

浦田「エー、はいどうも、どうもありがとうございました」

井上「やれやれ」

2. 安竹宇一郎（91才）とのインタビュー

7/9/76, 安竹氏宅にて録音

浦田「安竹さん、おはようございます。もう少しこちらによってください。あのー安竹さん、お名前は？宇一郎さんですか？」

安竹「宇一郎です」

浦田「今年何才です」

安竹「91才と8ヶ月」

浦田「アハアそれはもう92才に近いですね」

安竹「エー、92才で」

浦田「何県ご出身ですか？」

安竹「私、山口県です」

浦田「山口県のどちらですか？」

安竹「岩国市」

浦田「ハアア岩国市ですか？それで何年にお生まれになったのですか」

安竹「18年」

浦田「明治18年？」

安竹「明治18年2月9日生まれになっていますよ」

浦田「明治18年ね、それではちょうど日本ではまだ日清戦争の前ですね？」

安竹「いやいやこっちへ来てからどどんあったわけですね」

浦田「そうですか。なんとゆう船で来られたか覚えていますか」

安竹「ドーリックとゆうてね、あれはまた今も頭にあります」

浦田「ドーリック？」

安竹「ドーリックいうてね」

浦田「どこの船なんですか？」

安竹「今はハアーもうないですね」

浦田「どこの船ですか？国籍は？」

安竹「さあ、どこの船かね。パケばかりでしたね」

浦田「ああそうですか」

安竹「チャンガチャンガいうてね、いやいや船でしゃべったこともあります
の」

浦田「それで…あの一安竹さんはですね、契約移民ですか、それとも自由移民
ですか？」

安竹「自由移民です」

浦田「ああそうですか」

安竹「もうあの頃はもう條約はなかったです。ちょうど切れた揚句だったです
からね」

浦田「ハ、そうですか。それでは自由移民でこられたんですね」

安竹「ハイ、そうゆうわけですね」

浦田「で、いつハワイに来られたんですね？」

安竹「エー、それじゃけ、35年ですの、日本の年号にしたらね」

浦田「明治35年ですね。いくつの時ですか？」

安竹「18才」

浦田「うわあ、18才」

安竹「18才にまだ少し足らん位に来たんですがね、まあ18才にしときますよ」

浦田「18才ね」

安竹「ハアー 17才8ヶ月でね、横浜の移民やかましかった。18にならんならハ

ワイに送られんゆうので、それでも旅券が下がってね、ちゃんとあるから田舎から横浜の宿屋に出てね、そんならあんたら年がもう2ヶ月ぢゃがここで2カ月遊ぶかどうかあんたらが宿屋の自弁せれば、ここに居てもええ、ゆうて、それでもええゆうわけじゃったんですよ。ところがその当時ね。宿屋へね、こりゃ少し握らしたらすぐとみんなといかれるゆう話を聞いたんです。5円ね、日本金の5円、お茶ゆうて包んだらもうみんな行く人はどんどん検査通って、今日は何の検査ゆうていきよる。さあそのあけの日から、おーあんたも検査にいけちゆうんで、それですぐと又その前から検査いきよった人へ加わってね、それで一度にみんな検査すませて一所にこっちに來られました。いやその当時ね、5円くらいの茶代で…でものー」

浦田「それでもその頃の5円ちゆうたら随分値打ちがあったんでしょ」

安竹「なんです。このハワイへ来て3年も辛抱したらまあ必ず日本に帰るっちゆう考への人ばかりよね」

浦田「その時ですね、その当時は山口県岩国の方からあのーたくさん來られたんですか、それとも…」

安竹「いやいやだんだん連れもありましたね、それぢゃがそのそう一緒に団体になって來なかつた…」

浦田「來られないですよね」

安竹「いやいや自分自分で願いを出してね…ハワイいこう思へや」

浦田「ハイハイ、それであの…まあホノルルに着くまでに何日かかったんですか？」

安竹「ハア10日くらいはかかったでしょうね、船で」

浦田「ハア、10日くらいできましたか？」

安竹「10日も11日もかかったか知らんが…」

浦田「それで、あの、ホノルルに着かれてなんですかあの千人小屋に？」

安竹「イイヤー千人小屋へ」

浦田「移民局ですね」

安竹「ハアあれが移民局で、わしら今度後にね、1917年に事情があって、こっちへ子ども妻子を残して一寸行って来ました。その時にゃ、別の移民局へ上りましたがね、あの時の千人小屋ちゅうのはどうでもあんまり大きななんじゃなかったが、海の中にあったですか？」

浦田「海の中にあったんですか？」

安竹「イエー、こーまいこの栈橋をね、ずーっとこれを持ってそれへ上ったんですよ。どっちへも逃げられん様なそのーやっぱり中にはぬけてそのホノルルへでも海を泳いで渡るのもある。しょったんでしょね」

浦田「でもそんなに大きなあれでないといっても千人くらい」

安竹「千人小屋いいよったから…」

浦田「小さくとも千人小屋ゆうとったんですか？」

安竹「そうかも知れんが…もう千人小屋ゆうてね」

浦田「ただこう広い、何ゆうんですか。学校の講堂みたいな所ですか？」

安竹「いやいや」

浦田「仕切りか何かあるんですか？」

安竹「さあーどうだったかね。中にゃそのトレツへいって、トレツから下をくぐって、泳いでホノルルへ渡られたげなちゅうような話も時には聞きよったね」

浦田「ハアそうですか？」

安竹「それぢゃけ、ホノルルにはなんどか前に来てね、ホノルルにそれぢゃお前らハワイに行くならうちのボーイの何々に会ってくれゆうてね。来てもホノルルへあんたわしゃ上るっちゅう様なことでもゆうたら最後すぐに送還にあうよ。それぢゃけ1つもその当時はね、そう具合でホノルルへ上ったおらないですよ。みなそこそこの砂糖会社へね、割りあててね、あそこへ50人あそこへ30人ゆう様になったんでしょうて」

浦田「その時あの…例えばそのあの…移民官の方と話すのは…通訳とか…」

安竹「いやいや、通訳は居りますがね、それぢゃがなにゆう人かねー。大きなね、りっぱなね、日本人のおっさんだがね、ハア一年だったか…とて

も活発なひどい人がおられましたよ。勝沼さんはあれやまあ長しゅうね」

浦田「勝沼さんはその時には居られなかったんですか？」

安竹「エーその時には居られなかったね。何ゆうおっさんかね、とても立派な大きなおっさんぢゃが、カナカみたいな、土人みたいな人ぢゃがまあ前からハワイに居られるんでしょ。その時はまあ英語もできるんぢゃろうね。エーみんながおそれてね」

浦田「でその当時ですね、ホノルルに、まあ千人小屋から出られてホテルかどっかいかれるんですか？」

安竹「いやいや、ホテルやなんだちゅうないんで…」

浦田「ないんですね。その当時は」

安竹「ないない、大体ない、それからすぐとこまい船でね、カアイ島へ乗って上りました」

浦田「ぢゃあもうすぐカワイ島へ行かれたんですか？」

安竹「いやいや1週間くらい千人小屋でね」

浦田「千人小屋におられて」

安竹「検査をうけてね、そして今度割当ての砂糖会社へね、何人の上ったか、わしゃそのことまでわかりませんがね、やっぱり昔のこまい船でね、こまい船ちゅうても島を渡るんぢゃけ蒸気じゃったんですな」

浦田「そしてどこの耕地へいかれたんですか？」

安竹「カワイ島、マカヴェリー砂糖会社ですよ」

浦田「ハア、マカヴェリー砂糖会社」

浦田「ハア、マカヴェリー、ハイハイ」

安竹「そしてそこへ上ったまんまで落着いてね、それでえーことがあって、ワイフは貰うし子どもはできるし」

浦田「ではカワイ島で結婚されたんですか？」

安竹「イエー、カワイ島で結婚しました」

浦田「ハア—そうですか。それはあの、日本から来られてどれ位されて？」

安竹「さあね、若い18才で来てから、仕事はしましたよ。労働をね、その当時

はまだ砂糖会社があんまり大きくなかったもんですから、わしらが来てからまた働き人がどんどん輸入してね。そしてあんた、まあ大きな木はない、ついこまい木をまたひき倒してね。昔ステンブラーゆうて今頃はモートやガソリンなんかでチャーチャー鋤きますがね。昔はあんた大きなワイヤーをずっとこっちと向こう側へ引っ張ってそれが片一方ステンでね、鋤を引っぱるのよ。こう…そしてまた片一方にある蒸気がステンブラーが又こっち来たらそれを引っ張って行くようにして、畑を耕してある。まあそうゆうようなことをして又どんどん汽道をつける、とってもえらい仕事をしました」

浦田「今ステンブラーといわれました。それなんですか？」

安竹「スタンブラーゆうのはね、ステンブラーゆうてね、今はなんでもその油をたいたりね、しますがね、昔はゴエイダゆうてコールゆうてね、丸い火をおこすものがね、あればかりミルの中でも煙を上げてどんどんキビを製造するんでも、あのコールゆうのをね、日本語ではゴヘイダ（中国地方の言葉で石炭のこと）いいます。日本語でゴヘイダいいますがこちではコールゆう、あればかりちゃったんです。まあこのキャンプでもね、みんながたきものする人がどっと入り込んで来るから、家々に今はまあストーブからまた立派な…が座っとるわけですがの。昔はあんたプランテーションにそのやとった、大きな上へ鉄板をおいてね。それにまあこのゴヘイダをCoalをくべてね、そしてたてつけてからどんどん火をおこして、その上のかねがずっと熱うなってみんな10軒でも20軒でもね、そこにみんな集まってコックせるのよ。えーそうゆう風にしてね、ステンブラウゆうのが今のそのゴヘイダをくべてね、そしてワイヤの…大きなワイヤをずっとむこうとこっちと引っ張ってね、そして中へ畑を鋤くすきをずーっとミシンでひっつける様にして、そしてあっちからミシンをまわしたら、まあこっちのすきがドドドド…まあ引っぱってまあそのプラウがいくからね、それで畑をすきよったんです。そして今度向うへ行きついたら今度また片一方の両方にこうあるんですけーのース

テンプレーがね、それじゃけ又片一方が引っ張ってそのまた畑をすくって
るわ、そうゆう様な仕かけで昔はプランテーション砂糖会社の畑はね、
みんなすき倒して」

浦田「ハアーやっぱりこの…あのなんですか。自分たちでこう身体でやるんで
なくって」

安竹「身体やなんぢゃ出来ませんよね。それぢゃけ今わしらでも一寸、頭に浮
かぶのにね、今はまあ畑をすくんでもガソリンでね、あの一やりますよ、
昔のステンプレーちゅうのはとても力があるんぢゃからね」

浦田「ハアーわかりました」

安竹「畑をすき倒すのに、これ位すきこまれるね、大きなすきでね、でも片一
方からステンプレーちゅうのがドンドンひっぱるね」

浦田「ステンちゅうのは結局今わかったんですが、スティームsteamのことです
ね」

安竹「はいそうです」

浦田「スティームsteam、プラウplowですね。プラウちゅうのは、くわのこと」

安竹「あれを引っ張るんです」

浦田「はあ、なるほど」

安竹「そうゆう意味ぢゃちゅうことですね」

浦田「ハイハイ、わかりました」

安竹「あーゆうものは今はないですよ。今では改正しているから。ああゆうこ
とから何からわしらみな、あれやみな使うもんが研究せんじゃ、ボーシ
があきませんがね」

浦田「安竹さんはそうゆう仕事したんですか」

安竹「いーやいや、わしらはそうゆう仕事っせんじゃった」

浦田「何されたんですか？耕地で？」

安竹「耕地ぢゃ、日本から来たぢゃね、砂糖キビの中へ主に出ますよね。そし
て砂糖キビも作り上げたりそして、今の砂糖キビが太ると中のホレホレ
も取ったりせんと中にずーっともぐり込んで水が、あてられんけーの、

まあホレホレあたりやら、まあそうゆう仕事もするしそしてまあトンネルも掘りました。昔オロケレトンネルゆうてね」

浦田「ハアー聞いたことありますね」

安竹「キビへ水をやるのに、ずっと山の上から山はずーっと雨が降るからね、その一番上からわしらが居ったところから下を見るとこのワイメア谷ゆうてから下がどうもかすかに見えるくらい、谷の底が…その流れる水を一番上までトンネルを掘ってね、そーしてその水を今度砂糖会社にキビをあてる様に…そのオロケレトンネルちゅうのも1年程やって、その当時砂糖会社にはあんたわしらが来た当時は17ドルよ。26日働いて、それじゃけ17ドル…ひとへでも休んだら17ドルかけますのよ。26日働いて、それじゃけ、朝から晩まで働いても65銭ゆうがね…」

浦田「始めの頃は35銭だったでしょう。ホレホレ節にある35銭のホレホレしゅうより…」

安竹「イエイエーそうそうそう、ああゆうことね」

浦田「それじゃ安竹さん、ホレホレもやられたんですか？」

安竹「ホレホレちゅうのは、今の様にね、えーキビを作ればね、砂糖会社でキビがはなえのこまい時には葉をむしらんでもなんぼでも道があるから、ずっとキビに水があてられますが、ハナワイ出来るがね、今度ずーっと大きくなるとね、キビの中くぐられん様になるからね。ずーっとはびこるけ…その葉をむしっちゃね、水をあてては入る様に道をこさえる。それがためにホレホレ、あのまあそう忙しい仕事ぢゃないんぢゃからね、ぼつぼつ葉をむしったりね」

浦田「そんなにあのひどい仕事ぢゃないわけですね」

安竹「ひどい仕事ぢゃないですよね」

浦田「それぢゃあ、あの、女の人もやっておられたんですか、ホレホレは…どちらが？」

安竹「いやあ、女の方はそんな大きなキビの中へ入らないね」

浦田「入らないですか？」

安竹「いやいや、こまい時には水をあえるのにね、山で働かされるがね、大きなキビになったら女の人のはあんまり入ってやられるのは少なかったと思いますけどね」

浦田「女の人なんか移民時代の写真みると、こんなパパレかぶってこうやってね」

安竹「いやいや」

浦田「あれは…ホーハナやっておられたんですか？」

安竹「まあホーハナぢゃね」

浦田「ホーハナが多いんでしょうね」

安竹「まあキビがこまいときにはね、やっぱりそれをみなええ具合にキビかぶせてね、ドロかぶせて」

浦田「ハアーそうですか」

安竹「わしらもあーゆうキビの中に入って仕事をしたのは、やっぱり砂糖会社で人間がそこそこの砂糖キビがこの畑がなんぼリースあるゆうんだがね、10人なら10人、15人なら15人、うけ合はせてね、言葉のいけるものうけ合はせて、それがポーシでね、そして10人なら10人、人を使ってそして今度それをこまい時から太めていよいよはあ、キビがうえてからミルへ持っていくように…カチケンをする様になるまでね、作ってまあなんぼ…もらうってゆう様に請け合っつての、やったこともありますよ、それでもわしらのキビはつまらんでね、それで自分がそうゆう具合に請け合うと陰日向なしにね、キビを日にやかさんように、水もどどんあててから、ええ具合に可愛がって仕事をハッスルしますよね」

浦田「ハッピーコウしましたか？」

安竹「イヤー、ハッピーコウも若い時にはあれでも一人がね、わしらはその時は独身でひとりじゃからね、ワイフを貰うても、ワイフと共に山に行く様なことは1つもなかったのですがの、それからわしらもまあ次第にこの製造場の方に入ってね、ぬけられて…そしておかげでとても上の主人に可愛がられて、仕事をずーっとせて、それぢゃけ今日本から来た若い時

にゃ 18、9からワイフ貰う頃までね、汽車道がつく、土方の仕事やらトンネル仕事をやってね、まだその当時はひとりでしたよ。それから今度、ワイフを貰うてからミールへ、製造場へ入ってね、そして製造場でずーっとそこそこのまあ係で、ずーっと何やかにや仕事をしましたがね、主な仕事をわしはあてごうて貰うて、そこん仕事を教えて貰うてね、そしてまあしまいには、砂糖たきとゆうて、ジュガーポイルですよ。シュガーポイルというたらミルの中でもね、エンジンを使う人間とシュガーたく人間とこの1、2をあらそうような、月給頭よの…」

浦田「ハアーそうですか」

安竹「それぢゃけーはじめにゃみなあのシュガーを自分がたいてまあ、どんどん出すんです。大きな釜でね…今じゃあ、ああゆうこと出来んがまあようやったもんじゃ思うてね。そうゆう仕事をミルの中で40年くらい仕事したんです」

浦田「ほー長いですね」

安竹「で後にはハアー、自分が仕事をせんと、ずーっとその方のショカーを見て歩くさえすりゃね、フォーマンでね」

浦田「イエー、フォーマンでね」

安竹「イエーそして見て歩きさえすりゃええ…それぢゃがその頭をいためますよ。そのひと釜たいて砂糖を出すのがね、わしがずーっとそれを10年も14、5年も仕事をしてつとめたんですがの、やりそこのうて釜からとめてはあーこの砂糖なら結構できる思うて出しても今度それをミシンでね、乾かすんですよ。えーまあ今ここの白い砂糖とは違いますがね、それが乾かんゆうたら、あんたもうはしからはしからイーヂーの方から砂糖キビの汁をどどん、しめったやつをみな私の方の砂糖の方へ送りましようが、その汁をみな始末つけにゃいけんのじゃが…ひと釜出してそれが砂糖が思う様にいかだつたゆうたらあんた、もうあとの釜は変わってもはあー釜から出すことが出来んのよ。そうゆうことがあったら、とーつてもあんた…大変ですよ。そうゆうことのないようにね、とてもそのつ

くろうてね、砂糖のツゴウにて…まあとても一寸話にゃ出来ませんがね、えーああゆうことを後にゃフォーメンでね、ただ見てわしがおかしげになったら最後つくろうてね、そしてまあ出して人も20人ばかり居りましたよ。仕事メンが砂糖の係でね、まあおかげでずーっとしまいまではあ、それからつとめて主人も可愛がってわしや 70まで仕事をした」

浦田「カワイ島でその耕地で？」

安竹「その耕地の中で…ハアわしや 70になったけ、仕事をやめるぞゆうて主人にマネジャーにね、安竹のお前いけるだけやれ、なんぼでもええゆうて何年でもええゆけるだけ、ハアーちゃけ、やめますぞゆうてね」

浦田「1週間前でしたか、コホのノド自慢であのホレホレ節唄はれたのを聞きましたけども、すみませんがここで1つもう1度唄ってうただけませんかでしょうか」

安竹「イヤー唄いますがね、あのホレホレ節でもね、わしが習うて歌うわけじゃがどうもわしはわしの節はね、ただわしの独特で別に習うた節でもなんでもないんですよ。ただついまあこうゆうふうに唄うたら案外面白いかもしれん思うてただ唄うてみるわけなんです。あのこうゆうのがありませんが…

へ 行こかアメリカ 帰ろか日本 ここが思案の ハワイ国

まあこれもええです。

へ 条約切れたら キナウにのりて 行こかマウイの スペクルに

という句もありますがね、まあこれもええです。

それぢゃがあの、

へ 花嫁御寮で 呼び寄せだけど 指折り数えて 50年

まだ50年たたんですね まだその当時はちょっと唄が合わんのう…思
うてわしが考えるぢゃが…それからまあ

へ 日本出るときゃ 一人できたが 今は子もある 孫もある

ちめて今はあるがね、その当時にはね、まだ唄にしちゃ違うの？
それぢゃけね、これこうゆう風に唄う方がええ思うんですよ。

へ 行こかアメリカ 帰ろかジャパン ここが思案の ハワイ国

へ カネはカチケン ワヒネはハッピーコウ 夫婦そろうて とも稼ぎ

へ 明日はサンデー ワヒネを連れて アイカネ訪問と でかけよか

へ 条約は切れたし 頼母子しゃ落ちた 国の手紙にゃ 早う帰れ

そうゆう風のが一寸昔のホレホレ時分にまあ自分が仕事をせて唄うのに
ふさわしい唄があったと思うんですよ」

浦田「結局は今いったあの…結婚してもう50年とかね、それからね、今じゃ子も
ある孫もある、というのは後からできたんですよね、ずーっと後からで
きたんですよね」

安竹「そうなってくるよね、それぢゃけもういっぺん日本劇場で唄う様になる
かもしれんが今度はどうゆう様に唄ったらええかなと思って…」

浦田「ははは、いやーそうですか。それじゃ、今日はどうも朝早くからお邪魔
して有り難うございました。

安竹「これわし唄いましょうか1つ」

浦田「歌ってください、まだまだタイムあります」

安竹

へ 行こかアメリカよー 帰ろか日本 ここが思案の ハワイ国

へ カネはカチケンよー ワヒネはハッピーコウ 夫婦そろって 共稼ぎ

へ 明日はサンデーぢよー ワヒネを連れて アイカネ訪問とでかけよか

へ 条約は切れたしよ 頼母子おちた 国の手紙にや はよかえれ

いやあ、まああれまででおきますよ」

浦田「どうもどうも有り難うございました」

安竹「これ以上ちっとなんすると息ができん様になるけ…ええ声がでんで…」

浦田「いやどうも有り難うございました」

<注>

- 1) ホーハナとは、鋤で槌を耕し雑草をとる作業のことをさす。
- 2) ワヒネとは、妻のこと。あるいは女性たちのことをさす。
- 3) ルナとは、砂糖耕地の監督者のことをさす。
- 4) パケとは、中国人のことをさす。

<文 献>

服部逸郎 1967 「ホレホレ節について」『ハワイ・タイムス』7月5日。

中原ゆかり2010「ハリー・ウラタの採集ノート：朝倉カツエ、藤間美佐が語る <ホレホレ節>」『愛媛大学法文学部論集人文科学編』第29号、pp.51-77。

浦田実 1981 「楽譜になったハワイ民謡 ホレホレ節 (その一)」*KOKIKU*, 10月号、pp.31-32。
『朝日新聞』1985年1月7日「ハワイ移民百年で祝賀会 知事、日系一世ねぎらう」

Field Notes by Harry Urata: Kumatarō Inoue and Uichirō Yasutake Talk about “Hole-hole bushi”

NAKAHARA, Yukari

“Hole-hole bushi” is a folk song sung by nineteenth-century *issei* (first-generation Japanese immigrants) while at work in the sugarcane fields in Hawai‘i. The song was not taken up by the *nisei* (second generation) and was largely forgotten after World War II. However, Harry Urata, a *kibei nisei* (a *nisei* educated in Japan), recorded performances by *issei* and unified a tremendous range of idiosyncrasy in the melody, thereby obtaining copyright to the song in 1981. Since then, the song has spread, and musicians have performed it in both Hawai‘i and Japan.

Urata not only recorded “Hole-hole bushi” as performed by *issei*, but also interviewed them about their field labor and their lives, and transcribed his recorded tapes into notebooks. In this paper, I quote from the sections on Kumatarō Inoue and Uichirō Yasutake, following Katsue Asakura and Misa Fujima, the interviewees in the last issue (Bulletin of the Faculty of Law and Letters, Humanities No. 29).